

計画演習 I

08 2. STATION X ARCHITECTURAL STUDIOS

開講年次：学部3回生後期

[担当教員]

大谷弘明(日建設計) 近井務(大林組)

小幡剛也(竹中工務店)

[Teaching Assistant]

伊藤大輝(A65) 小林諒(A65) 山本修大(A65)

■課題概要

敷地は阪急六甲駅北側プラットフォーム沿いの区画。ここに建築教育施設、建築の周辺にかかる情報の発信拠点、そして駅機能の複合施設を計画する。

阪急六甲駅、普段のある一日の乗降客数は 29,566 人。一方教育施設の主たる利用対象者は神戸大学建築学科関係者約 350 人。そしてここでの情報の受信者は不特定多数、無数の市井の人々。ここを通過または滞留・滞在そして交錯する人々が建築やそのインフォメーションを介することで創造的コミュニケーションが生まれ、多様なアクティビティが可視化される場所。このようなイメージを顕在化させる、唯一無二の、ここにしかない磁場を創造することが本課題の主旨である。

■附帯条件

駅機能は敷地内のいずれかに再構成する。既存バス・タクシー乗降機能は敷地外の隣接地に移設するものとし、計画敷地内には不要。教育施設は建築学科に所属する学部生、大学院生、社会人、研究者、教授らが主たる利用者。情報受信者は建築のみならず関連する分野のインフォメーションや展覧会、ショーなどに集う人々。それぞれの機能は独立することなく輻輳する形態をもつコンプレックスとすることが望ましい。建蔽率・階数は規定しない。但し、周辺環境に配慮したものとし、ランドスケープデザインも建築と同様の地平で思考する。施設の延面積は 8,000 m²程度。



国土地理院 地理院地図 (<https://www.gsi.go.jp/>) をもとに編集者作成

■ 計画敷地
■ バス・タクシー乗り場移設敷地

課題敷地

■講評会の様子



中間講評会



最終講評会

FACADE OF STAIRS 一階段がまちを彩る一

植田美香

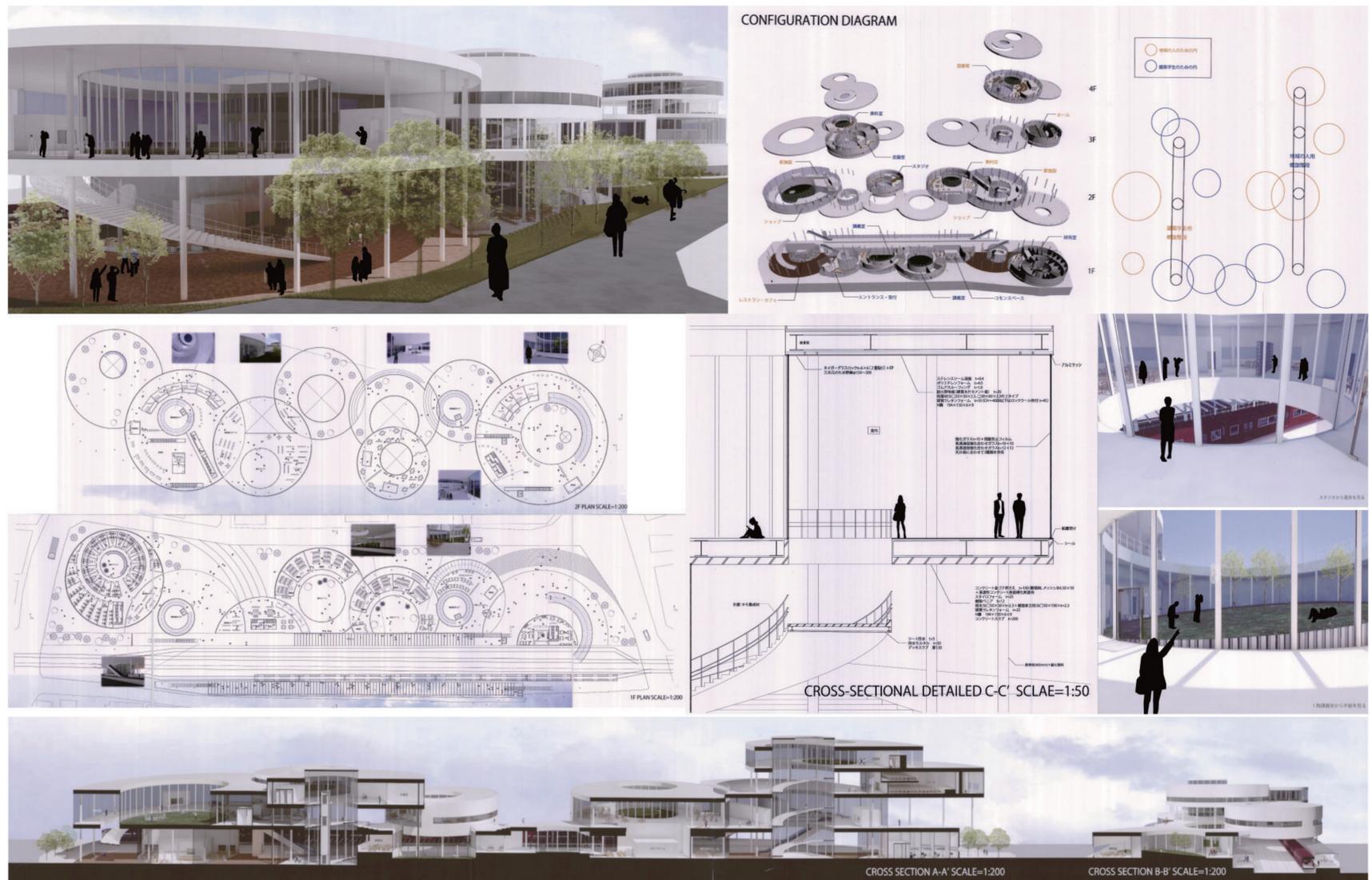
南北方向のみに階段を配置し東西の抜けを確保する。階段の幅を変え開口をあけることで動線の自由度を上げ、階段が多様な使われ方の出来るく場となる。また、階段が庇、窓となりその下に豊かな空間をもたらす。階段が機能を超えて学生や駅利用者の拠り所となる。



空と繋がるまる ーまるから広がる多様な空間ー

大西琴子

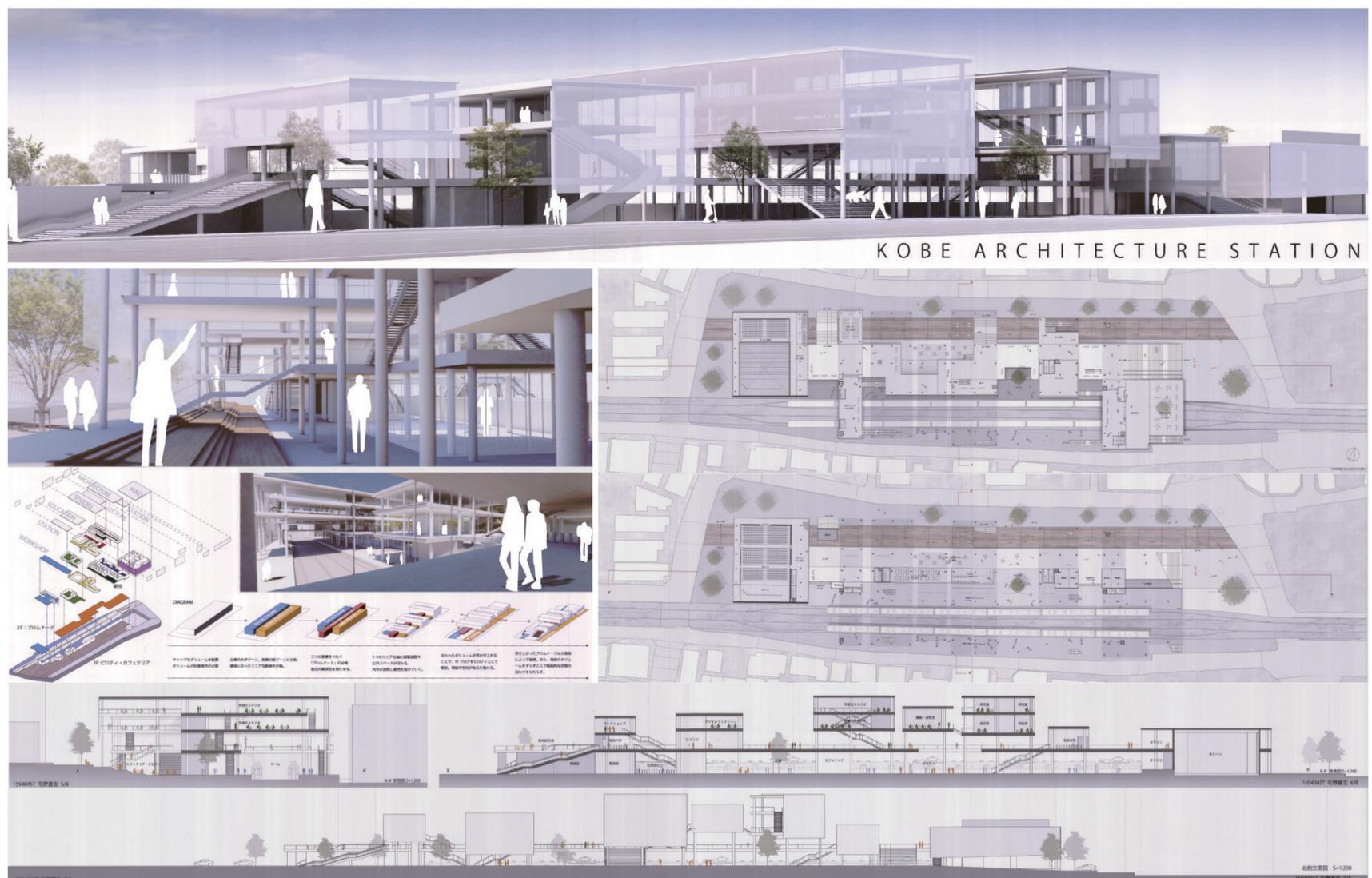
建物の中に屋外空間を作り、空のまるい庭でワークショップ等を行う。外観だけでなく中からも浮遊感を感じれるよう、内部空間も円形に。地域のためのまると大学のためのまるとは組み合わせられているが、2本の階段シリンダーを配置し動線的に分けている。



KOBE ARCHITECTURE STATION

宅野蒼生

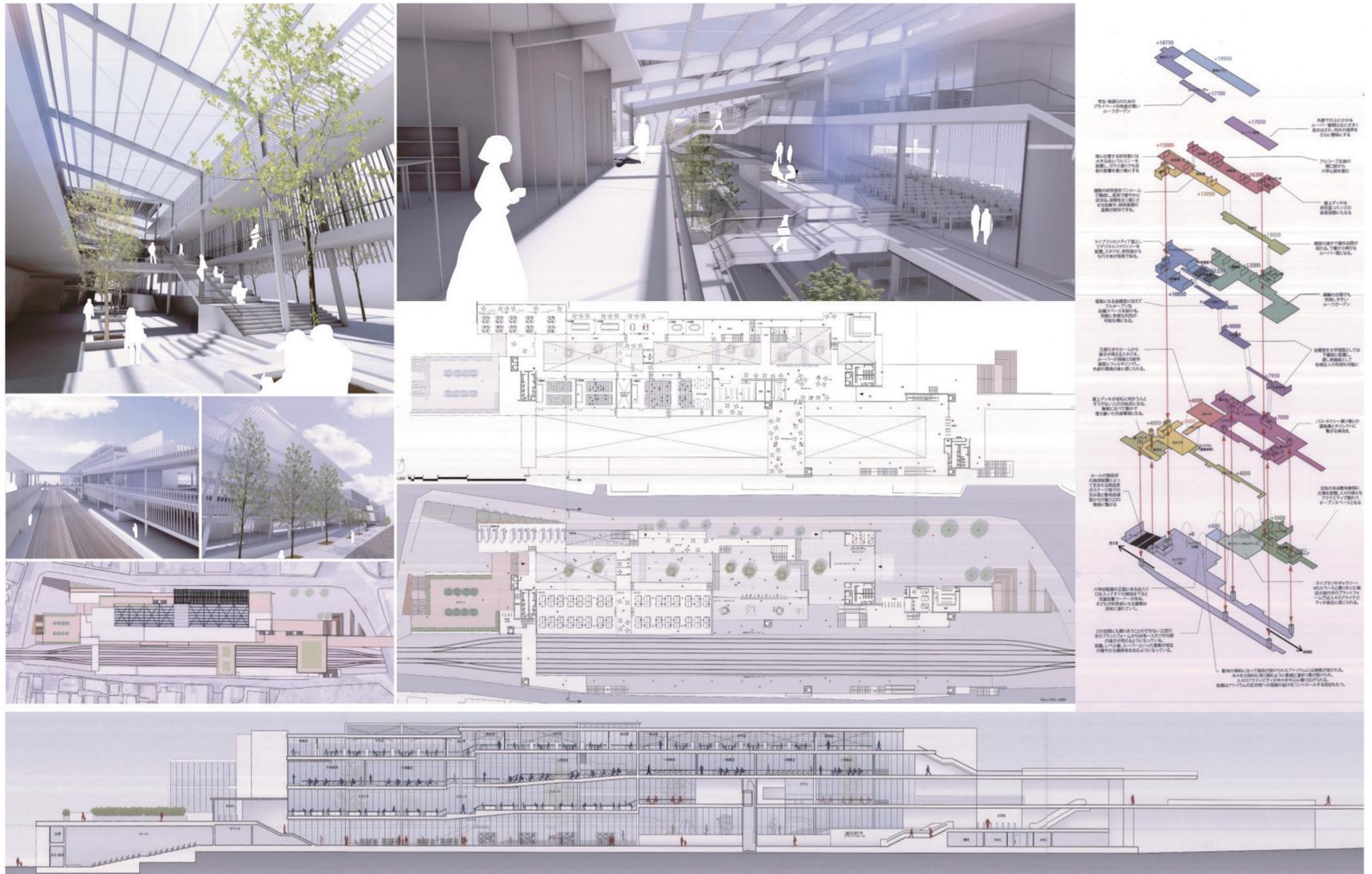
駅と大学という2つの要素を繋ぐために「建築」を挿入する。動線と直交したボリュームは浮かせることで、アイレベルでの視線、空気、光が南北に抜ける。ファサードから溢れる光は建築の営みを伝え、街と大学のアクティビティを立体的に交差させる。



繋がりと隔たり

中倉俊

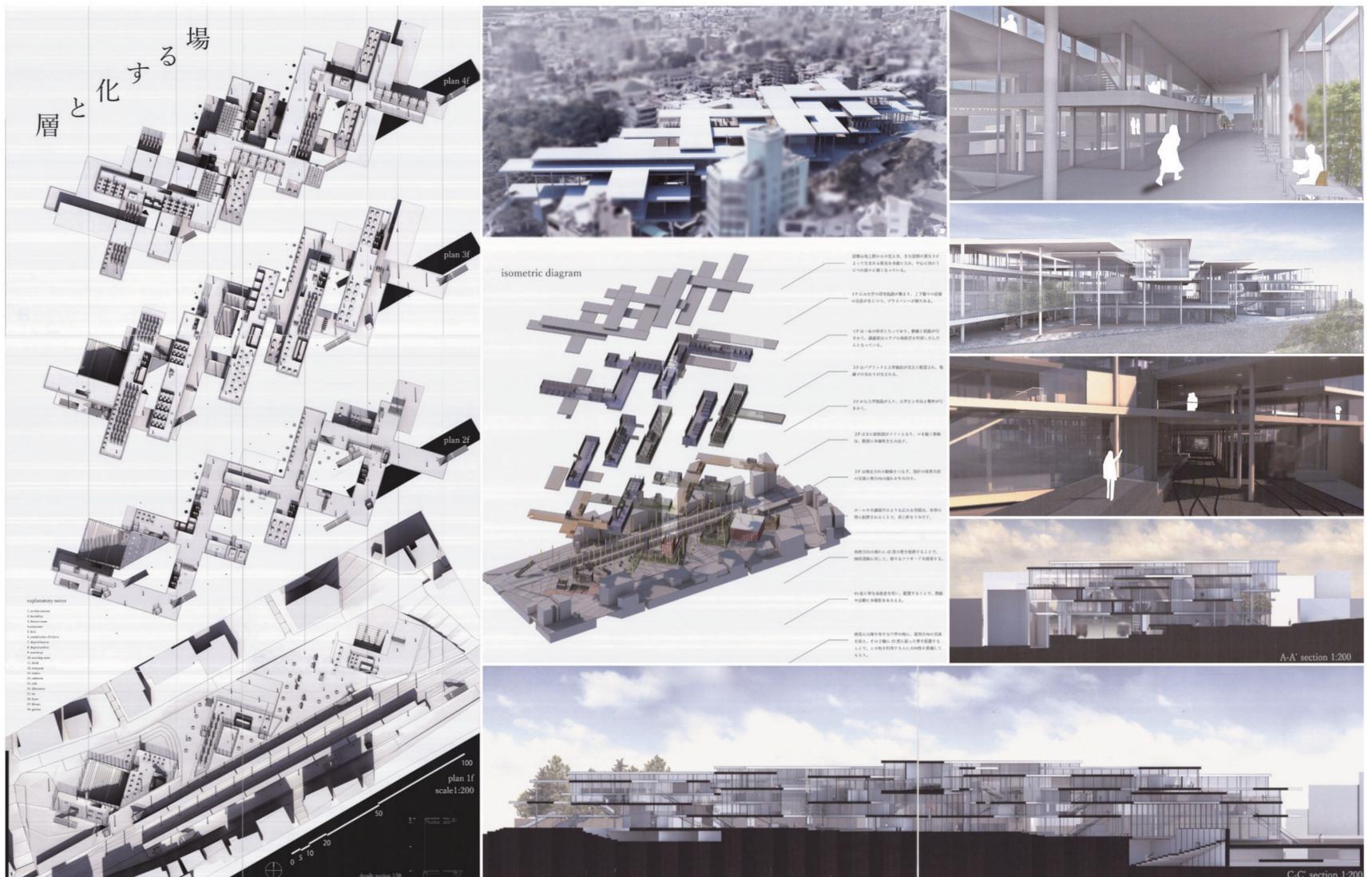
スラブを螺旋状に積み重ねて各機能を配置する。螺旋の形態が地域・駅・大学・緑の要素を繋ぎ、隔て、互いに程よい距離の関わりをもたせる。螺旋中央のアトリウムでは移動と滞留が木々を中心に立体的に混じり合い、多様なアクティビティで溢れていく。



層と化する場

北條太一

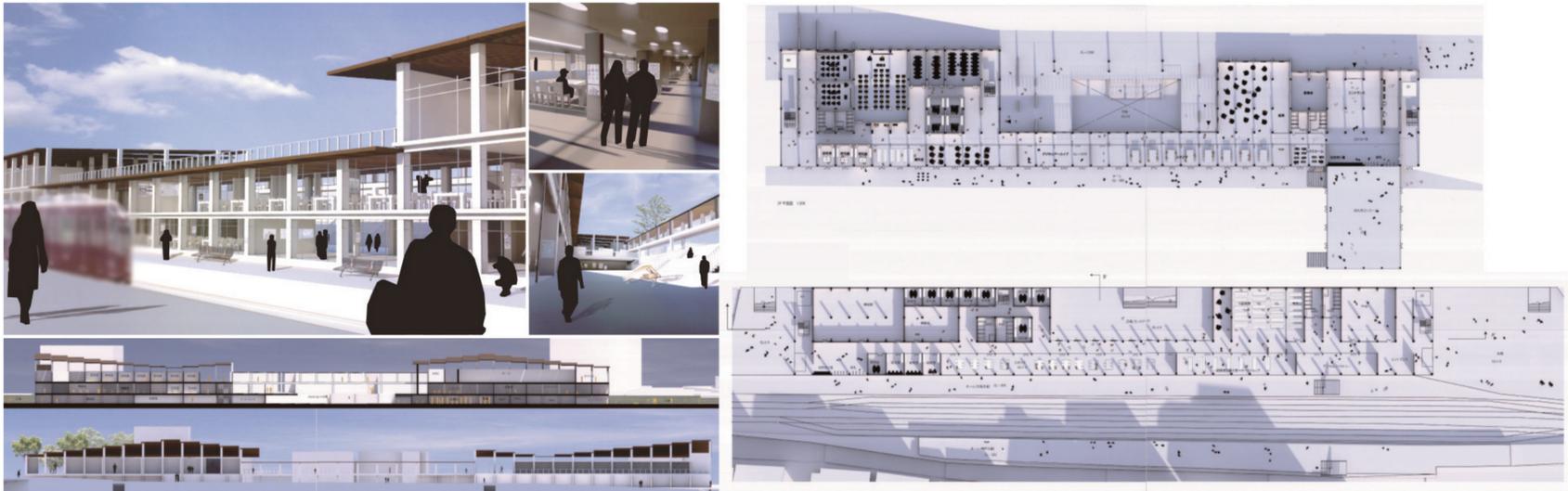
駅利用者、市民、学生が交わるところでは交わり、見えるところでは見えるような建築を提案した。レベル差や 45° の角度により、余白を生み多様な空間を作り出す。駅から東西、南北方向に賑わいが広がる建築を提案した。



Showcase

黒田英伸

個人で製作し、発表するという当たり前の流れ。成果物だけが注目を浴びるのでしょうか。ホームに隣接した三層のレイヤーを配置することで、利用者と学生の「見る・見られる」の関係を作り出す。活動全てが表現の手段となり利用者全ての日常に彩りを加える。



termination

田中惇

10年後の六甲駅はどのようなになっているだろうか。六甲周辺は巨大なベッドタウンとなり、今の駅のままでは人を抱えきれなくなっているだろう。そこで大学と駅を融合した巨大な施設をここ六甲に提案する。



道を紡ぐ

不動栞里

南北の研究棟に、地域の人でも利用できる空間を東西に挿入し、建築教育の活動を見せる。幼稚園と対応させて、電車の見える大きな広場を設け、学生が休憩したり、子供も遊べる空間とした。地域住民、駅利用者の日常生活の中に、建築学生の活動が交わっていく。



絡まり合う流れ

松井優香

枠型のハコ、つり橋、メインの道という3つの要素で構成する。枠型のハコは接地性を高め、中の学生の活動を絵画のように演出し外に発信する。つり橋は学生と地域の人々の動線を絡ませ合い、メインの道は人々のアクティビティが溢れる地域の憩いの場となる。

